

まことと会便り

2016/10

みなさまいかがお過ごしでしょうか。
今回は、裏面に清基秀紀先生のご法話を載せました。

最近ではテレビなどのメディアに仏教や僧侶が取りあげられるものをよく目にします。

他の宗派と比べたときに、浄土真宗は「戒律」というものがなく衆生皆が救われるというので、何をしても良いのか？などと揶揄されることもあります。

「戒律」はただの規則ではなく、戒律守ることと自体が悟りを開くための修行の一つです。

浄土真宗では、凡夫の私たちは生きて悟りを開くことは難しいと考えますから、修行としての「戒律」はありません。しかし、人として、仏教徒として、阿弥陀さまのご縁をいただく者として生きていくときに、敢えて悪いことをしようとは思えないはずです。

皆さんもお持ちの赤い表紙の経本の最初に、浄土真宗の教章が記されています。

その中の宗風に「―信者はつねに言行を慎み、人道世法を守り、まことのみ法を広めるように努める。また、現世祈禱やまじないを行わず、占いなどの迷信に頼らない。」とあります。

行事予定



十月 三日 本願寺伝灯奉告法要

四日 団体参拝(一回目)

十月十九日 一時半より

まこと会 念仏奉仕

十月二十七日 光圓寺 報恩講

二十八日 秋季永代経法要

講師 瀧淵良孝師

二十七日十二時よりお齋がござります

今年は南観音中・西地区の方々がお招待

下さいます よろしくお願いいたします

光圓寺 報恩講参りのお知らせ

例年通りに、各ご家庭への報恩講参りを左記の日程で参ります。今後変更の可能性もございますので、各ご家庭へのお知らせにて、再度ご確認ください。よろしく申し上げます。

十一月 七日 楠那・日宇那地区

十一月 十七日 皆実町地区

十一月 二十一・二十二日 己斐地区

十一月 二十四日 宇品地区

十一月 二十五日 南観音中・西地区

十一月 二十八日 南観音東地区

十二月 八・九・十日 丹那地区

十二月 十二日 本浦地区

十二月 十五・十六日 大河地区

十二月 十七・十八日 打越地区

十二月 二十日 吉島地区

新しくお参りをご希望の方はお寺までお問い合わせください。

お浄土と私・・・その距離は？

皆さん、お彼岸にお墓参りはされましたか。うちの境内墓地にも天候不順な中、今年も多くの皆さんがお墓参りにいらっしやいました。京都女子大学講師の清基秀紀先生が、彼岸に寄せて次のように書かれています。

浄土ははるか彼方の西方にあると、お経には説かれています。美しい夕陽の沈む方角と、先に亡くなられた人々の行かれた方向とを重ね、夕陽の沈む西方にお浄土があると説かれたのです。そのお浄土の方向がよく分かるのが、夕陽が真西に沈むお彼岸の頃です。彼岸、お浄土が最も身近に感じられるお彼岸は、先にお浄土に往生された大切な方々をしのぶ時でもあり、そのお浄土を思うときでもあり、私たち自身がやがてこの世の生を終えた後に行くところとして、この私の向かう方向を改めて確かめるときでもあります。

私たちは、この人生を終えると阿弥陀さまの本願によってお浄土へ往生すると、親鸞聖人は教えてくださいました。

それでは皆さん、お浄土とはどのようなところでしょう。私たちがこの世の生を終えた後に往く、全く別の世界のように思っていないませんか？

死んだ後は阿弥陀さまにおまかせをされるけれども、この世は現世利益を求めて神仏に祈るといような誤解をされている人もおられます。

お念仏の教えは、単に浄土へ往生することが目的ではありません。お

浄土で楽しく過ごすためと考える人もいますが、そうではなく、私たちは仏になるためにお浄土へ往生するのです。仏になるとは、さとるといふこと、「わたし」がという「我」を離れて真実に目覚めることです。煩惱具足の私たちは、この世でさとって仏になることはできませんが、阿弥陀さまの本願によってお浄土へ往生し、仏になることができます。その仏になる道をしつかりと歩むことが大切です。

お浄土への往生はこの世を生きる私たちの今と無関係ではありません。

わたしたちを導く阿弥陀さまの本願は慈悲の心です。「あらゆる人々が必ず浄土に生まれてさとりをひらくようにしたい。この私の願いが叶わなければ、私は悟りを開いて仏にはなりません」と、自らのさとりよりも先に私たちの救いを願ってくださいました。その願いが私たちに届き「南無阿弥陀仏」とお念仏が私の口から出てくるのです。そして、お念仏を大切にされた私たちの先輩方は、仏となつて私たちを導いていらっしやいます。「いつも仏さまが見ていらっしやる」そう思うことができれば、私たちは阿弥陀さまのお心に沿った生き方というものが自然と生まれてきます。時には、怒る時も他人そっちのけではしゃぐときもあります。でも、そんな時、これでいいのかな、とわが身を振り返り、仏さまの鏡に映された自分を見つめ、阿弥陀さまのお慈悲の光に照らされた生き方、それを自覚することが大切です。